**週刊やすいゆたか再刊23号16年４月28日**

**孫に語る日本国の建国の物語**

**14．大帯彦大王（景行天皇）の筑紫遠征**

絵里:お爺ちゃんの説だと神武東征は一豪族の東征なので、その後も筑紫倭国は残り、大和政権は畿内中心の政権だったことになるわね。御間城入彦大王は倭大国魂命（大物主命）の祟を鎮めた後、四道将軍を各地に派遣し、西日本の統合は成し遂げたのかしら。

やすい:大彥命を北陸に、武渟川別を東海に、吉備津彥を西道に、丹波道主命を丹波に派遣したのを後世「四道将軍」と呼んでいるんだ。問題は「西道」に筑紫や出雲を含んだかだ。出雲振根を討つ話が入っているんだ。出雲振根は筑紫に出掛けて いたというようなことが書いてあるので、筑紫倭国と大和政権は出雲に対する支配権をめぐって綱引きがあったかもしれないな。筑紫の熊曾が背いたという話は、景行天皇の筑紫遠征や地方の風土記にある話だから、御間城入彦大王が筑紫まで支配していたがどうか、『日本書紀』では明確ではないようだな。

弘嗣:お爺ちゃんとしたら、筑紫倭国が続いていたはずだから、崇神天皇が四道将軍を どこに派遣したとしても、筑紫には派遣していないだろうということだね。まあ一度将軍を派遣したからといって、領土に組み込まれたかどうかはまた別の話でしょう。ともかく景行天皇つまり大帯彦大王の筑紫遠征までは筑紫は大和政権の領土ではなかった。では何故、景行天皇は筑紫遠征を行ったかでしょう、問題は。

絵里:『古事記』には景行天皇の筑紫遠征記事は全く無いのよ。ところが『日本書紀』ではかなり字数を使っているわけ。だから景行天皇の筑紫遠征はほんとにあったのとか、そもそも景行天皇て実在の人物なのっていう疑いをかけられる人物でもあるのよ。

弘嗣:疑わしいからといってなかったコトにしちゃうと歴史がつながらないぞというのがお爺ちゃんの方法論でしょう。なかったコトにしちゃうとそこの穴埋めが難しい、確かに倭国はいつかは統一されたはずだし、神武東征が一豪族の東征だったとすると、筑紫倭国は続いていたはずなんだな。邪馬台国の時代は倭人の国だったので、そこまでは続いていたわけだ。そして大和政権とは特に対立関係や衝突とかはなかった。ただ出雲国を綱引きしあっていた可能性はあるけれどね。

ところが景行12年の記事で、熊曾が背いたというので筑紫に行ったらそこには、熊曾だらけで、筑紫倭国は存在していなかったのでしょう。これは神武東征が国ごとの東遷だったので、その時から筑紫倭国はなかったということなのか、そうでなければ熊曾によって滅ぼされてしまったということです。

絵里:熊曾が筑紫倭国を滅ぼしたのだったら、日本の歴史書には残らなくても、中国の歴史書には書かれたはずじゃないかしら。だって邪馬台国についてあれほど書いていたんだから。暗黒の四世紀という形で中国史書でてこないのでしょう。

やすい:熊曾は筑紫倭国つまり邪馬台国連合を滅ぼしたのだけれど、だれが筑紫の王になるかで激しい内乱状態に陥っていて、中国との外交関係を結ぶどころじゃなかったんだな。直ぐに大帯彦大王との戦いになるしね。

弘嗣:大帯彦大王(景行天皇)が筑紫に遠征するきっかけは『日本書紀』では「景行天皇12年紀」で「12年秋七月、熊襲背いて貢たてまつらず。」となっていて、これでは筑紫倭国なんてなかったことになるね。

絵里:もちろん記紀は奈良時代に編纂されたので、浪速は**「蓋（けだ）し六合（くに）の中心（もなか）か。」**と神武天皇は認識していたことになり、そこを都にする国家というのは筑紫を含んでいる事が前提だったのよ。しかしお爺ちゃんの理屈では、元々の大八洲における国家形成の構想は、高天原や海原が指導していて、三貴神による三倭国を形成し、競合させて三国をうまくコントロールしていくことで倭人連合を発展させていくというものだったわけ。

弘嗣:ところが須佐之男命は伊邪那岐神から大八洲統合の使命(ミッション)を与えられていたと思い込み、その使命を大国主命に託したために、大国主命は大国である出雲帝国を形成して、大八洲のほとんどを統合し、筑紫倭国も呑み込もうとした。それで高天原の使者がなんとか筑紫倭国への侵攻を思いとどまらせた。すると大国主命は善隣友好で平和で豊かな国造に方向転換し、経済圏としての倭人連合全体を出雲帝国に呑み込んでしまおうとしたわけだね。

やすい:そうなんだ、そこで高御産巣日神は、一挙に出雲帝国を解体するために武御雷率いる奇襲軍を極秘裏に訓練して、大国主命らを倒し、倭人三国を再編成しようとした。しかし大国主命晩年の平和で豊かな国造りによって恩恵を被っていたので、奇襲軍に対する反発が強く、饒速日二世が大国主命支持勢力を糾合して、奇襲軍を撃退し、饒速日王国を再建したわけだ。

絵里:高天原・海原・筑紫倭国連合にすれば、饒速日王国を倒した出雲帝国を倒してやったのだから、その恩を忘れて武御雷軍を撃退したのはけしからんわけで、再建された饒速日王国は打倒対象だったのね。それで筑紫の一豪族だった磐余彦一族の浪速遠征を支援したということね。そこで議論の中心は、この東征が筑紫倭国全体の東遷なのか、一豪族の東征なのかということでしょう。邪馬台国が筑紫にあったかだけでなく、筑紫倭国が四世紀初めまで続いていたかどうかが決まるということね。

弘嗣:一豪族にすぎなかった論拠としてあげられているのは、一つは邇邇藝命の一夜妻の子の孫が磐余彦だったということで、その暮らしぶりからみても宮廷で王子だったとは思えないということだったね。

絵里:もう一つは筑紫倭国の伝承が磐余彦一族の血脈のことしか残っていないということでしょう。これは見ようによっては、筑紫倭国の存在そのものが疑われるところだけれど、神武東征以後だけでなく邇邇藝命から磐余彦東征までの筑紫倭国の王朝史も丸ごとなくなっているということは、筑紫倭国の口誦伝承がすべて消えてしまうような事件が起こったことを意味しているという主張ね。

やすい:見事な整理だ、ありがとう。その事件こそ、語り部まで皆殺しにされた熊襲による筑紫倭国滅亡ということなんだ。大王自ら遠征するというのはおそらく余程のことだろう。普通なら熊襲が貢を怠り、背いたら将軍を派遣するところだ。おそらく筑紫倭国は高天原・海原が全力で支援していたにもかかわらず、滅ぼされたのだから、筑紫にいた高天原や海原の支援部隊も損害を受け、追い払われたということだ。それで大和政権が熊襲攻めの主役にならざるを得なくなり、大王自らが率いなければならなかったという有様だったんだろう。

弘嗣:それじゃあ倭人連合全体の危機と捉えて大帯彦大王は遠征したと思うけれど、なんといっても筑紫は熊襲や隼人の土地だったわけで、多勢に無勢でしょう。急拵えの大和政権軍で、筑紫倭国を滅ぼし、高天原や海原の支援部隊を追い払った熊襲の大軍を撃破するのは難しいでしょう。相手の地元で百%アウェーじゃない？

やすい:そうなんだ、かなりピンチだとは覚悟していたと思うよ。でも着いたころにはもう相手は激しい内戦状態に陥っていたんだ。

絵里:なるほど敵の分裂を利用して活路を開いたのね。熊襲は筑紫から倭人を追い払ったとはいえ、どんな国をつくるのか、誰が王になるのかで思惑が部族によって違うから、結局強い者が勝つみたいな気持ちになり、互いに潰し合いになってきたのね。

やすい:大帯彦大王が、周芳(すほう)つまり山口県の娑麼(ざま)に着いたときに烟りが見えて、賊軍がいるということで偵察したら、神夏磯媛(かむなついそひめ)の一団だ。彼女は大軍を率いていて、一国の魁帥(かいすい、頭目)なんだ。熊襲は蛮族と思われているから王とは書かず、魁帥と表現しているんだな。それが大帯彦大王が使者を送ったら、なんと「三種の神器」を差し出してあっさり恭順したんだ。
榊

**「天皇の使者の至るを聆(き)きて、則ち磯津山の賢木(さかき榊) を拔(ぬきと)りて、以て、上枝に八握劒を挂(か)け、中枝に八咫鏡を挂け、下枝に八尺瓊(やさかに)を挂け、亦(また)、素幡(しらはた)を船の舳に樹てて、參向(でむひ)て啓して曰す。「願はくは兵をな下しそ。我の屬類(ともがら)、必(ふつ)に違(そむ)く者有らじ。今、將に歸德(したが)ひなむ。」**

絵里:重要な箇所だから口語訳しておきましょう。

**「天皇のお使いが到着したと聞きまして、それで磯津山の神事に使う 賢木を抜き取りまして、上枝に八束の剣をかけ、中枝に八咫の鏡をかけ、下枝ら八尺瓊勾玉をかけ、また、降伏の印の白旗を船の舳先に立てました。そして神夏 磯媛が出向いてきてこう申し上げたのです。「お願いですから討伐の兵を差し向けるのはおやめ下さい。私の仲間には決して大王に背くものはおりません。今まさに帰順して大王の徳(めぐみ)をお受けしたいとぞんじます。」**

弘嗣:その話ちょっと出来過ぎで信用できないな。いくら内戦していても、大和から来た敵である倭人の頭目に早速恭順するなんて、あまりに大和政権に都合よく書きすぎだよ。

やすい:神夏磯媛は内戦でかなり追い詰められていて起死回生策で大和政権に帰順し、協力して筑紫を平定して、筑紫における実質的な支配権を手に入れようとしたのかもしれないね。大王が大和に引き上げたら、機会を見て独立を図ればいいとも考えていたかもしれない。

絵里:それより私は、敵陣偵察に行った大和の斥候隊が隙をみて女王を拉致し、大王の筑紫討伐に協力すれば、貢を寄こすのを条件に筑紫でのある程度の支配権を認めるということで、丸め込んだのではないですか。

神夏磯媛の熊襲征伐

弘嗣:それは韓流時代劇の見過ぎかな?でも山口県の所まで来て待ち構えていたというのが事実なら、女王の側から取引する意志はあったのかも、あるいは大和政権の大王を討ち取って、その手柄で内戦を優位にしようと考えたかもしれないね。

やすい:だとしたら敵の動きを察知した大王が、陽動作戦で狭いところか何かに女王軍をおびき出し、奇襲して拉致したうえで、交渉し、進んで降伏してきたことにして女王の地位を保証し、筑紫征討に使ったということも考えられるな。

弘嗣:まあ戦(いくさ)ですから、どんな凄い手を使ったか分かりませんね。大帯彦大王はかなりの智将だったようですから。それよりどうして熊襲の女王が「三種の神器」をもっていたのですか？そもそも本物の三種の神器ですか？

やすい:熊襲が筑紫倭国を滅ぼしたという仮説が正しければ、これは武御雷軍が大国主命から奪ったものが、筑紫倭国にあったということで説明できます。

三種の神器

大国主命は、須佐之男命から生太刀を受け継いでいました。実はこれが天叢雲剣だったのです。月讀命の八尺瓊勾玉は筑紫倭国で継承していました。天照大神の八咫の鏡は、大国主命が三輪山に侵攻したときに饒速日大王が秘蔵していたのを奪ったわけです。

だから三つとも筑紫倭国にあったわけですね。それを熊襲が筑紫倭国の王宮を略奪して手に入れていたということです。倭人にとってはそれぞれの建国神のオカルト的能力を増幅する神器として最高の神器なので、うれしかったでしょうね。
　もちろん本物がどうものなのか熊襲の女王には分からなかったでしょう。大王も筑紫倭国が大事に秘蔵してあったものなら本物ではないかとは思ったでしょう。

絵里:大帯彦大王(景行天皇)の策略を用いて、敵同士を戦わせるというやり方は、ひどいわ。娘を寵愛したうえで、その娘が大王に気に入られるために父を酒に酔わして殺したら、親不孝だといってその娘を殺し、妹を国造にしているのよ。

**「ここにおいて、幣(賂まいない)を示してその二人の女を欺いて幕 下に囲った。天皇則ち市乾鹿文（イチフカヤ）と通じ寵愛した、ある時市乾鹿文は天皇に申し上げました。「熊襲が服さないといって愁うなかれ。妾(わらわ)に良き謀(はかりごと)あり、卽ち一、二の兵を己に従わせ。家に返って、醇い酒を用意して己が父に飲ませた。たちまち醉って寐てしまった。市乾鹿文は密に父の弦を断ち、ここに從兵一人が進んで熊襲梟帥(くまそたける)を殺した。天皇、則ちその不孝の甚きをにくみて、市乾鹿文を誅(ころ)した、それでもって弟(妹)の市鹿文(いちかや)に火國造を賜った。」**

やすい:賂つまり賄賂だな、要するに金品や地位、大王の寵愛などで誘って、親不孝をするようにさせたのは、大王なのに、儒教道徳を振り回して姉を殺し、父殺しをしなかった妹を取り立てるのは酷いといえば酷いね。熊襲梟帥を倒すというのは決定的なことなので、身も心も捧げた市乾鹿文にとっては忠誠を示すにはこの方法しかなかったのかもしれないね。ただし、儒教の立場は、国家の秩序も家族の秩序に基づいていて、親孝行に優る徳はなく、親不孝に優る罪はないんだ。天下国家のためなら親孝行を犠牲にしてもよいというのは、本末転倒のひっくりかえった考え方だということだな。

弘嗣:じゃあ熊襲征討が失敗してもよかったわけ、**市乾鹿文**が親不孝をしないで済んだのなら？大王にとったら娘達を金品や地位や寵愛で縛り付けて親不孝をさせるのは、これは天下を統合する偉業の一環として英雄的なふるまいだろう。でもその誘惑にのって親不孝をしてしまった本人は、やはり悪であり死を賜って当然だということになるね。

イスラエルの密偵を隠した遊女ラハブ

絵里:それはユダヤ教やキリスト教などの『バイブル(聖書)』の世界とは随分違うわ。モーセがヘブライ人たちをエジプトでの苦しみから救い出して、脱出し、ヨシャの時代に今のパレスチナにあたるカナンの地に侵攻するんだけれど、そこのエリコの町に攻め込むのに、そこの町の遊女ラハブの家族だけは助けて、ほかは殺し尽くしたの。それはイスラエルの偵察隊がばれないように匿ったからなのよ。つまり彼女は自分の家族を助けてもらうためにエリコの人々の絶滅に手を貸したわけ。それはイスラエルの神を畏れ敬ったことになるから、正しい行為とされ、イスラエルの人々と暮らすことができたのよ。

やすい:ジハド(聖戦)という意識が強いからだな。神に従う者と神に背く者の二分法だから同胞を裏切ったことは、むしろ正義のためであって勇気ある行動と称えられるわけだ。ところが熊襲と倭人の戦いにおいては神は部族や人にとっての拠り所や守り手や恐るべき存在であって、超越的な絶対者ではない。それぞれに正義があるから、同胞を裏切ったり、親を裏切った罪は帳消しにならないんだ。それにしてもユダヤ教・キリスト教的な倫理観と儒教的な倫理観の違いが浮き彫りにされる見本だね。

弘嗣:神夏磯媛は自分たちは大帯彦大王に背かない、でも他の熊襲たちは背いているから、他の熊襲たちをやっつけてくださいといってますね。これなどは熊襲にあるまじき裏切りだな。そして仲間だった熊襲たちを悪者扱いしている。まあ、内戦になっちゃったからだろうけど。

絵里:そうね、鼻垂とか耳垂とか、麻剥とかいう名前で呼んでいるけれど、アダ名なのかな？鼻垂はみだりに仮の名をかたるということは、大ぼら吹きかな、ともかくいい加減なことを言って皆を騙して、菟狹の川上に仲間を集めているらしいわね。耳垂は殘賊貧婪なので略奪や破壊行為を行って、貪っているということでしょう。しばしば人民を略すというのは、敵からだけでなく、一般の民家も襲っているということでしょうね。麻剥は密かに徒党を集めて高羽の川上に潜んでいるとか報告して、今までの仲間を裏切っているわ。どれも一族を率いている熊襲の集団の長みたいね。

やすい:大和から筑紫に遠征するということは、敵だらけの処で戦うのだから、敵の仲間割れを誘い、賂や地位や寵愛などを餌に釣って、相手に裏切りや親不孝などをさせて内部崩壊させないととても勝てないわけだ。その辺りをリアルに描いているところを見るとどうだろう大帯彦大王の筑紫遠征をデッチ上げとか、ただの創作みたいに決めつけるのはもったいない気がしないかい。

弘嗣:もし、もしもだよ神武東征が筑紫倭国全体の東遷だったとしたら、そして三貴神の海下りとかなくて、もちろん宇気比の差し替えもなかった、天照大神は最初から主神・皇祖神だったとしたら、三種の神器は天照大神から邇邇藝命に授けられたわけで、それを神武は大和に運んだから、「三種の神器」を賢木に吊るしたのは何故かだね。熊曾も三種の神器信仰があったのか、それとも大和政権の「三種の神器」信仰を知っていて喜ばせようとしたのか謎だよね。

絵里:それにしても西日本の統合を成し遂げた快挙の筑紫遠征を『古事記』が何故カットしたのか、不思議だわ。『古事記』はヤマトタケルの活躍が力を入れて書かれていたので、大帯彦大王はむしろヤマトタケルを熊曾や蝦夷に殺させようとする悪役なので、あまりかっこいいトコを書きたくなかったのかな。それじゃあ歴史物語の本としてはお粗末な話でしょう。

やすい:もし、磐余彦東征が一豪族の東征だとしたら、景行天皇の筑紫遠征は、はじめての西日本統合だから、大々的に描くところが、『日本書紀』は、磐余彦東征こそ西日本統合だったことにしたので、熊曾の大和政権への反乱を抑えた話になっています。しかもそれに七年もかかったので。手こずってしまったことになります。